

## ガオ地方の紹介

### ■ガオ地方概略

マリ共和国北東部に位置するガオは、1つの市であり、地域であり、ガオ地方の地方庁所在地でもある、マリ北部最大の都市です。ガオ地方の西部を南北に縦断するようにニジェール川が流れており、ガオ市はそのほとりに位置しています。ガオ地方は、南のブルキナファソ共和国、東はニジェール共和国、北はキダル地方、西はトンブクトウ地方に囲まれています。

ガオ市近隣のアンソンゴ市とメナカ市には動物保護地域があり、かつては多くのキリンやガゼルが見られました。しかし、1990年初頭からマリ北部で繰り返し発生している政情不安やトゥアレグ族の反乱などによって、野生動物の生息数は激減しています。加えて、1973年から1984年の大干ばつはこの地方に打撃を与えました。

また、ガオには重要な文化遺産があります。とりわけ、15世紀に繁栄したソンガイ帝国の皇帝の墓地と考えられているアスキアの墓は、2005年の1月、ユネスコ文化遺産に登録され注目を浴びました。また、ニジェール川の右岸にあるコイマの赤い砂丘は、政情不安になる前は有名な観光地でした。

### ■ガオの歴史

ガオ市は7世紀頃、ガオ王国時代に創設された都市です。その後、マリ帝国(1230年~1645年)によって制圧されました。中世の頃のガオ市は、北アフリカのマグレブや中近東とブラックアフリカを繋ぐ、西アフリカの重要な交易都市でした。また、ガオ市は、サハラ砂漠を南北に縦断する交易を支えるよう、砂漠の商人達が通る道に沿って位置していました。街では、北部の生産物である塩や紙を南部の金と交換するため、北からやって来たラクダを引く商人や、南から来たジュラ(*dioulas*)と言う船乗り達が行き交っていました。

ガオの街は、長きに渡りソンガイ帝国(1464年~1590年)の首都となり、サハラ交易で繁栄していました。1591年、モロッコ人に侵攻される前には10万人近くの住民を抱える、西アフリカ最大の都市を築き上げていました。モロッコによる統治以降、ガオの都市は衰退しましたが、一方でマリ中部の都市であるセグーやジェンネ、北部のトンブクトウの繁栄に貢献しました。

### ■民族と人口

2009年の統計では、ガオ地方の人口は55万人弱で、ガオの主な民族は以下の通りです。

1. ソンガイ(ソンライ)：ニジェール川の中流に居住するナイル・サハラ語派のソンガイ語を話す部族
2. トゥアレグ：サハラ砂漠西部が活動範囲のベルベル人系の遊牧民
3. プル：遊牧民を起源とし、牧畜などを行う西アフリカに多く分布する民族

4. アラブ（モール/ムーア）：ベルベル人とアラブ人の混血のアラブ系民族
5. ボゾ：ニジェール川を移動しながら漁をする漁労民族

#### ■姉妹都市

ガオ市は、フランス北東部に位置するティオンヴィル（Thionville）市と姉妹都市提携を結んでいます。また、フランス語圏国際市長組合とのパートナーシップにより、排水と廃棄物処理の分野で、ナンシーの国際水処理センターと交流があります。

#### ■経済

ガオ市には国際空港があり、今もなお、アフリカの北部と南部からの産物が行き交う要所となっています。北部からはナツメヤシの実や布地、粉ミルクなどが、南部からは豊富な落花生が集まります。

このように、古くからの交易は未だ続いています。もちろん変化もあります。それは、サハラを超えてやって来る商人のラクダが四輪駆動車に代わり、南からの産物は丸木舟でなく、トラックやバス、船でやって来るようになったことです。